

## 平成 29 年度プロジェクト研究実績報告書

【研究課題】	地域資源活用プロジェクトを通じた社会人基礎知識養成のための教育プログラムの開発
【研究代表者】	池田 幸代（東京情報大学・准教授）
【研究分担者】	中尾 宏（東京情報大学・准教授） 小早川 睦貴（東京情報大学・助教）
【研究報告及び成果の公表等】	
1. プロジェクトの目的	
<p>本研究では、地域社会とのかかわりの中で実践的・体験型学習を実施し、学生の社会的基礎力の向上に貢献できる教育プログラムを開発するものである。第六次産業化を目指し四街道市、および千葉市の地域資源を活用して、商品やサービスを生み出す企画提案に取り組む。このプロジェクトを通じて、千葉市および四街道市との視点から広域での学生活動を実施し、社会人基礎力という観点からの教育を目指す。</p>	
2. プロジェクトの実施内容	
<p>6月15日（金）より、下田農業ふれあい館（下田都市農業交流センター）（千葉市）において、「よつグルメ研究会」（四街道市）とともに開発した商品の販売を開始した。7月20日までの間、販売実績の記録と商品の品出し等を行った。6月15日（金）は翌日から2日間開催される福祉施設紹介・販売フェア「大きなテーブル」出店に向けた商品の製造を「よつグルメ研究会」のメンバーとともに行った。6月16日（金）、17日（土）に開催された「大きなテーブル」当日は、本学学生も参加し、スープカレーや鹿放パン、「よつどきくっきい」などの販売を行った。試食を配布しながら、来場者に商品の魅力を説明することの難しさを体験した。</p> <p>7月15日（土）、8月5日（土）、8月26日（土）は本学オープンキャンパスにおいて、学生がプロジェクトの活動内容を説明するとともに、来場者向けに「よつどきくっきい」に関する試食を含めたアンケート調査も実施した。</p> <p>10月からは、三回にわたりオープンキャンパスを通じて行ったアンケートについて、データの入力と解析をすすめた。アンケートでは「下田農業ふれあい館」にて販売されている商品5種類「よつどきくっきい（ゴボウ）」「よつどきくっきい（しょうが）」「鹿放くっきい」「ごまくっきい」「落花生くっきい」「しあわせくっきい」を対象とした。アンケートの質問項目のうち「買いたい」「おいしい」を総合評価項目とし、またこれらに影響すると考えられる要因7項目「①外観が良い、②食べやすい、③甘さが良い、④風味が良い、⑤食感が良い、⑥硬さが良い、⑦後味が良い」について1～5点で評価をもらった。分析方法では、相関分析を行い、相関係数をもとに使い散布図を作成した。これにより、例えば「よつどきくっきい（ごぼう）」では、優先的に改善すべき項目として「甘さ」「食感」「後味」が抽出された。</p>	

図：「よつどきくっきい（ごぼう）」の分析結果



11月より、新たな商品開発に向けて市場調査として、農産物販売店「(株)Agreen」(千葉市)を訪問し、販売されている商品、価格帯などの情報収集をすすめ、新商品開発に向けた企画の提案と発表を行った。また、「(株)Agreen」と共同で商品を開発し、千葉市内の販売店(「下田農業ふれあい館」など)で販売する可能性について打ち合わせを行った。

11月10日(金)には、「四街道市産業まつり」にて販売予定の商品の製造を「よつグルメ研究会」のメンバーとともにに行った。11月11日(土)、11月12日(日)当日は、「四街道市産業まつり」の会場内店舗において、販売活動を行った。

12月15日(金)、12月16日(土)は、「よつグルメ研究会」のメンバーとともに「ユニバーサル農業フェスタ」出店に向けた仕込みと販売を行った。

3月8日(水)に「みんなで地域づくりセンター」において「よつグルメ研究会」主催の市民向け「カステラ・グリッシーニづくり講座」に参加した。またそこでは、「下田農業ふれあい館」における販売実績とオープンキャンパスを通じて行ったアンケート結果について、学生がプレゼンテーションを行った。また、次年度千葉市の農産物販売所にて販売予定の商品についても、「小松菜」「ビーツ」を用いたクッキーについての可能性を話し合った。

### 3. プロジェクトの成果

地域資源としての活用シーズ(野菜や果物など)を発掘し、地域資源の活用ニーズを調査することについては、「下田農業ふれあい館」や「(株)Agreen」を通じて実施できた。その結果、新たな提供すべき商品を地域企業に提案するに至った。実践的・体験型学習を通じた「学生の社会的基礎力の向上に貢献できる教育プログラムの開発」においては、学生に「自己評価表」への記載を依頼した。結果、後期の活動では自己の能力について、前期に比べて、より厳しい評価を行う学生が多かったことが明らかになった。リアルな学びを通じて、取り組み前よりも想像以上に「困難な課題がある」ことに気が付いたとみられる。今後もこのような実践型の学びとしてのプロジェクトの取り組みが、今後の社会人としての「生きる力」を伸ばすきっかけとなるよう、改善を図っていきたい。

以上